●里山の会の活動について　11 月も下旬になり、朝晩の気温も低くなり紅葉も深まって多くの木々も葉っぱを落とし冬支度が始まりました。まもなく師走の足音がせわしなく迫ってきます。物価の高騰、ウクライナ戦争、北朝鮮の弾道弾の発射、そして閣僚の相次ぐ辞任更迭、統一教会問題、暮らしにくい時代になってきました。中でも第 7 波となったコロナは里山の会の活動に大きな影響を受けたものです。しかし各理事の奮闘で里山の会は例年通りの実績を上げてきました。特に中聖牛や竹蛇籠の取り組みは桂川・嵐山に設置する画期的な出来事で成果を収めました。そしてフィランソロピー協会から活動資金の寄付の申し出があるなど想像もしない出来事がありました。12 月には昨年に引き続いて同志社大学サッカー部からボランティアの申し出があって、里山農園に遊歩道実現に大きく前進する見通しとなってきました。躍進するための新年度の活動方針へのご提案をお待ちしています。

●「地球生態系に独裁生物はいますか？」顧問：桜谷 保之先生から会誌 53 号の原稿をいただきましたが全文落丁になりましたので、本号に掲載いたしました。ぜひご一読をお願いします。

ヒトという動物は古今東西を問わず、戦争を行ってきました。そのかなりの戦争は、ある国のたった一人の独裁者の指示で行われてきたようです。たった一人の人間が戦争によって世界を一変させてしまうのです。戦争による多数の犠牲者、莫大な物的損害、地球環境の破壊等、戦争がもたらす損失は計り知れません。

オオタカは種の存続のために行動しています。決してその個体の権力や自分の地位保全のためではありません。なわばり争いもある個体の地位を維持することはあっても、全体としてその種類ひいては生態系の繁栄につながっているのです。ある地域(たとえば、やましろ地域)で、オオタカが生息しているとすると、そのことによりその生態系が安定して保たれていることになります。オオタカはその地域の生態系(食物連鎖)の頂点に立っています。オオタカの生息により、その生態系のオオタカ以下の生物が安全に守られているということで、オオタカのような種をアンブレラ種(umbrella species: umbrella は傘という意味の他に保護や庇護という意味もあります)と言います。オオタカの生息によりその地域の開発が行われないといった社会的面もあるかもしれませんが、オオタカが生息する環境を保全するとその傘の下にいる生物多様性も保護されることになります。オオタカがいなくなるとその餌であるウサギ等の草食動物が増えすぎて、植生が破壊され(シカの個体数の増えすぎもその例)、生態系が不安定になってしまいます。オオタカは確かにウサギ等を捕食しますが、ウサギを絶滅させることはありませんし、必要以上に殺しません。つまりオオタカが生態系の安定(バランス)を保っているわけです。オオタカは生態系(生態ピラミッド)の頂点に立っていますが、決して独裁者ではありません。アンブレラ種の例としてオオタカは分かりやすい例ですが、もちろん各生態系でアンブレラ種は異なりますので、身近な生態系でアンブレラ種を観察してみてください。生態系は森林生態系や河川生態系、水田生態系、都市生態系等植生や景観等で分類して調査・観察することもできます。こうした生態系は個々の生物種の進化とともに長い年月をかけての「生態系の進化」と言ってもよいかもしれません。この点で人間社会は古代より何度も何度も戦争を繰り返し、いまだに進化(核兵器等の出現によりむしろ退化？）していないといえます。もちろん、「核の傘」は傘であっても全く論外です。

アンブレラ種は「種」であって「アンブレラ個体」ではありませんが、それでは地球生態系には本当に独裁生物(個体)はいないのでしょうか。外来種が侵入すると、在来の生態系が撹乱されてしまう例はこれまでに数多く知られています。たった「1 種類」の外来生物の侵入によりこうした現象が起こされる例は数多くあります。たとえば、外来種セイタカアワダチソウが日本の生態系に大きな影響を与えてきた例はよく知られています。しかし、たった「1 株」のセイタカアワダチソウが侵入してもこうした影響は起こ

らないはずです。やがてその株が死滅すれば、在来生態系に影響を与えることはまずないはずです。多くの外来種の場合、侵入先で繁殖、増殖して在来生態系に影響を与えているわけです。外来種、在来種を問わず、1個体(1頭、1匹、1羽、1本、1株)の生物では、その地域ましてや地球生態系の独裁者になることはありえないと思います。

一方、人間社会では、独裁者ではなく一人の人間が世界中の人々に良い影響・効果を与えてきた例はこれまで数多くあります。芸術家や芸能人、スポーツ選手等の活躍、作品は人々に勇気や感動を与えてきました(直接的ではなく、テレビやネット等を通じての間接的な場合も多いと思いますが)。また、科学などの学問分野では、ある一人の研究者が世界中の人々の健康や医療、地球環境の保全等に大きな貢献をしてきた例は数多くあることはご存じのとおりです。進化論のダーウィン、遺伝学のメンデル、物理学のレントゲン、細菌学のコッホ等はその研究業績や発明によって、今日でも我々の生活に多大な貢献しています。たとえば、レントゲン(写真)にはだれでもお世話になっていると思います。

とにかく、人間社会が良い方向に「進化」し、世界が平和になることを願うばかりです。

● 京都府自然保護課への報告文章案　京都府自然保護課では貴重種の冊子の発行にあたって里山の会にカスミサンショウウオに関して掲載文の提供の依頼が来ましたので金田徹さんにご依頼をした文を紹介します。(最終掲載文章は修正訂正されます)

「カスミサンショウウオについて」

2007年に京田辺市普賢寺地区でカスミサンショウウオ（現在ヤマトサンショウウオ）の卵嚢を発見して以来観察調査を実施、継続してきたが、2017年に成体を発見する。以後現在まで観察を継続し、生息を確認している。成体発見場所は民有地で西側は急傾斜地で枯れた巨大木を取り除くなどして生息池の環境保存を行ってきた。ところが長年に渡った土砂流出があり下手の田圃に流出土砂が堆積し、流出防止工事が2022年2月に地主によって実施され、生息地への流水路が消滅の危機となったが、トイを設置し生息池(たまり)の枯渇を乗り越えることが今年もできた。工事以前には卵嚢が3対と生体4匹を確認している。2022年4月には新たに卵嚢13対を確認できた。工事後の2022年6月19日に自然環境保全京都ネットワークが環境調査を行い、58㎜の幼生を確認し安堵をしている。

なお、トイからの流入水が時々詰まったりして流れなくなるので、池の水が干上がらないよう対策をほどこし、池の水が溜まるように努力をしてヤマトサンショウウオの保全に努めております。

●小川芳也さんの松江通信 No.8

アシナヅチから話を聞いた須佐之男命は，八俣の大蛇の形を尋ねました。アシナヅチは，「目は赤加賀智（あかかがち：ほおづき）のように真っ赤で一つの身体に頭が八つ、尻尾が八つあります。その身体の大きさは八つの谷、八つの峰を渡って背中にはコケやヒノキやスギが生え、その腹を見ればいつも血にまみれてただれています。」と申しました。

そこで須佐之男命は、「八岐大蛇を退治したら、あなたの娘さんを私の妻にくれませんか？」と言いましたところ、「恐れ多いことですが、あなたはどなた様ですか？」とアシナヅチは申しました。須佐之男命は、「私は、天照大神の弟です。今、高天原天から下って来たところです。」と答えました。アシナヅチ・テナヅチは「それは恐れ多いことです。娘をさしあげましょう」と申しました。　　この続きは次回に･･･